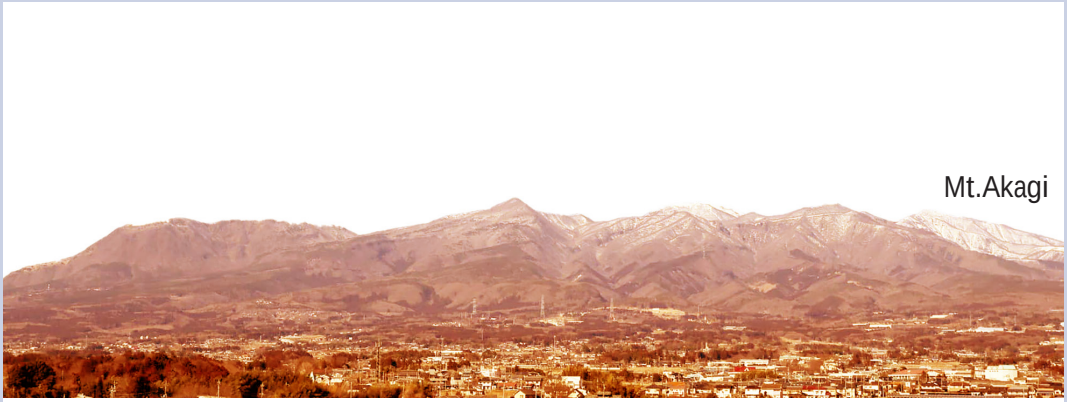

リカバリー

recovery

奪還

上

八重野 充弘

（電子版）

プロローグ

一九七二年二月二十八日夕刻――。

ブラウン管には、固定カメラがとらえた山荘の外観が映し出されている。動きはなく、まるでスチール写真のようだ。雪に覆われた急斜面にへばりつく三層の建物は、会社の保養所だったとは信じがたいほどの無惨な姿をさらしていた。午前十一時に始まったビル解体用の大鉄球による攻撃で、モルタルの外壁の数カ所に大きな穴があき、高圧放水車から射出された水が凍りつき、屋根やベランダから氷の刃となってぶら下がっている。

束の間の静寂。バリケードの背後や屋根裏の壁の銃眼から、ここ数分か十数分、敵は顔をのぞかせない。だが、緊迫感はむしろ高まっていた。画面手前では、濃紺の戦闘服に身を固めた機動隊員が、身じろきもせずに次の指令を待ち、実況担当のアナウンサーは、警視庁特科車輌隊に所属する警部と、同第二機動隊隊長の二人が被弾し、死亡したことを繰り返し伝えている。ほかに機動隊員やテレビカメラマンにも負傷者が出ていて、事態は最悪の方向に向かっているように思えた。

「テレビから目が離せねえから、仕事になんねえよ。さっさと片付けてくれりゃいいのにな」

作業服を着た太鼓腹の中年男が、空になったどんぶりの縁を割りばしで叩きながらつぶやき、同意を求めるように周りの客の顔を見回した。二、三人は軽くうなずいたが、彼らも目は吊り棚

の上のテレビ画面に釘づけである。
「問題は、人質になっている管理人の奥さんを、無事に救い出せるかどうかだ」
別の初老の男が、うめくように言った。先ほどから繰り返し聞かされる言葉で、これにはもうだれも反応を示さない。
(そろそろ終わりだろう。警察は今日中に決着をつける腹だ)
山菜そばのつゆの残りをすすりながら、桜場鋼介(さくらばこうすけ)は思った。この大衆食堂に入ってまだ三十分もたたないが、カウンターの隅の席から、首を後ろに回して断続的に見るテレビの映像に、その気配を感じていた。
群馬県沼田(ぬまた)市の東郊外、国道一二〇号に面した小さな食堂は、大きな石油ストーブを囲んで、四人掛けのテーブルが四つと、厨房に対面する五人分の丸椅子を並べたカウンターがあるだけだ。混み合う時間帯ではないのだが、食事をすませた後もテレビを見るために居座る客が多いので、ずっと満席の状態が続いている。
午後四時過ぎ、催涙ガス弾による攻撃が再開された。これまでにないすさまじい数だ。山荘は見る間に白煙に包まれた。続いて放水が始まる。拳銃による警官の威嚇射撃と、死にもの狂いの相手のライフル音が交錯する。
機動隊員の動きが激しくなった。五、六段に積み重ねられた土嚢を乗り越え、銀色に輝くジュラルミンの大楯が、二重三重になって山荘ににじり寄っていく。すでに隊員の一部は建物の中に

3

進入しているようだ。ガス弾攻撃と放水が交互に行われ、やがて包囲の輪は最小に達した。
「いよいよ突入だな」
厨房から声がした。店主が手を休めて、カウンター越しにテレビをのぞき込んでいる。すでに陽は沈み、窓の外には夕闇が迫っていた。画面も同じ暮色に染まっている。現場の南軽井沢は、ここから直線距離で六〇キロほど。
午後六時ごろ、ついに三階のベランダのバリケードを押し破って、機動隊員の一団が部屋へなだれ込んだ。数分後、一階の雨戸がぶち抜かれ、紺地にオレンジ色で「9機」と染め抜いた第九機動隊の隊旗二本が、左右に大きく振られた。
「やったぞ、救出成功だ！」
だれかが叫んだ。毛布にくるまれ、機動隊員に両側から抱きかかえられて出てくる管理人夫人の姿がアップになる。食堂内に拍手が起こった。
続いて、ずぶぬれの犯人たちが、次々に連れ出された。男ばかり、全部で五名。報道陣のカメラの放列に近づくと、隊員が怨念のこもった手で彼らの頭髪をわしづかみにして、無理矢理顔を上げさせた。いずれも朦朧とした様子で、眼の焦点が合っていない。唇を腫れ上がらせ、血を滲ませている者もいる。二人はまだ少年と思われた。
（あいつだ！）
鋼介は一つの顔をはっきりと覚えていた。最初は去年の暮れに榛名湖（はるな）の近くの山中で出会った。

二人連れの登山者風の若者のうちの一人とは二言三言、言葉も交わした。あのとき、口を開かなかったほうの男だ。上目遣いのぞっとするような冷たい眼。それが強烈な記憶として残っているのは、つい二十日くらい前、再び妙義山麓の洞窟の中で遭遇したからだ。

（榛名、妙義。オレと同じところを）

単なる偶然でしかない。どう考えても、自分との間に接点などあるはずもない。同世代の人間として、強いていえば、彼らが一部の進歩的知識人と称する連中によって、武力革命という幻想を煽られていたことに、多少の憐憫の情は感じるものの、露ほどの共感も覚えていなかった。

客たちが、店主に長居をしたことを詫びながら、ぞろぞろと席を立つ。残ったのは鋼介を含めて五人ほどになった。

（全国民が、やっとテレビの前から解放される）

鋼介は醒めた安堵感をおぼえた。冷たくなった番茶を一口含んで腰を上げると、勘定を払い、建て付けのよくないガラス戸をこじ開けた。外は小雪が舞っていた。雪と白煙と水しぶきに包まれた山荘の光景が、まだ瞼に焼きついている。

（あっしには関わりのねえことでござんす）

ふと、そんなセリフが頭に浮かんだ。先月から放送が始まった連続テレビ時代劇の主人公の口癖だ。流行語になるかもしれない。そういえば、あの渋い顔の俳優に少し似ていると、大学の同級生の女の子にいわれたことがあった。面長で身長が一八〇センチ近くあって体格もほぼ同じ。

調子に乗って、コンパで楊枝代わりに焼き鳥の串をくわえ、アルミの洗面器を逆さにして頭の上にかざし、そのセリフを真似たことがあった。大受けだったが、やったのは一度だけだ。もう一つ思い出したことがあった。主人公の故郷は確か上州三日月村　。ここ数年、群馬県内はくまなく走り回ったが、そんな名前の村には入ったことがない。

（どこかで、だれかが――）

　売り出し中の髭面の男性歌手が、野太い声で歌う主題歌までが浮かんでくる。そうだ、「だれか」ではないが、あるものがいま自分を待っている。そして「どこか」ではなく、もはやその場所はピンポイントまで絞りこむことができた。十日後、いや、一週間もすれば自分はまたここへ戻って来る。時機を逸するわけにはいかない。いよいよ決着をつける日が近いのだ。

　鋼介はバイクのイグニッションキーを差し込み、手首をひねった。軋むようなセル・モーターの音に続いて、太いエンジン音が凍てついた空気を切り裂く。ヘルメットを入念に装着し、革のジャンパーのファスナーを上げて、分厚い革手袋に手を通すと、アクセルを一気にふかし、交通量の減った上り車線に滑るように進入した。

1

フリースクールの遊星学館は、東京郊外の狛江市にある。小田急線の喜多見駅から歩いて十分ほどの閑静な住宅地の中。近年、建て売り住宅のためにだいぶつぶされはしたが、一九八八年の創設当時は、農地やこんもりとした林が点在し、武蔵野の面影を色濃く残していた。三十一年たったいまも、この種の学校としての敷地の広さは十分だろう。一階には広い厨房とダイニング、代表室兼応接室、スタッフルームがあり、二階には五つの教室が並んだその奥に、図書室兼コンピュータルームが設けられている。

長方形のシンプルな形の校舎の裏には、アンツーカーで固めたテニスコートが二面とバスケットボールのコートが一面、さらに、最近になってフットサルのピッチも一面つくられた。そのほか、ビニールハウス付きの五〇〇坪ほどの農園があり、その周りには四季折々に実をつけるウメ、モモ、ビワ、イチジク、カキ、ブルーベリー、キウイなどの果樹が植えられている。ビニールハウスの中では、モンキーバナナやマンゴー、矮性種のパパイヤも立派に育つ。さらに、三個のミツバチの巣箱からは、年に二〇キロ近い蜂蜜が採取される。

そのスクール内で今朝から異変が起きていた。ネット時代の今日、普通にあることかもしれないが、タイミングから考えても、どうもおかしい。副代表の名前をホームページに載せたとたん、問い合わせが二件相次いだのだ。メールではなく、代表電話にコールがあった。最初の相手は女

性で、警視庁の総務部広報課の所属であると告げた。二人目の男性は内容の不可解な事務所名を名乗り、いずれも面会を求めてきた。

電話を受けたのは事務の女性で、副代表が不在であることを知らせた。事実、副代表の桜場鋼介は講演のため関西へ出張中だった。帰京は二日後の予定だ。そもそも本人は、ホームページに名前を載せることに乗り気ではなかった。それを代表の須藤陽香（すどうはるか）が説得してようやく承知させたのだった。フリースクールとして知名度が上がってきた遊星学館には、方々から講演の依頼が舞い込む。陽香ができるだけ対応するようにしているのだが、学校経営はけっしてラクではなく、あまり時間の余裕もない。そこで、最近は鋼介が代理で行くことが多くなった。鋼介の講演が好評だという理由もあり、スクールの二枚看板として、代表と副代表の名前をホームページに載せることになったのである。

それが、思わぬ結果を招いているらしい。どんな事情かわからないが、ネット上で検索をかけた者が複数いる。今日たまたまということではないだろう。ずっと以前から調べていたところに、アップされたばかりの情報が引っかかったとしか思えない。報告を受けた陽香は、すぐに父親の須藤誠志郎（せいしろう）のもとに走った。住まいはスクールに隣接して建っていて、独身の陽香はここで両親とともに暮らしている。兄が二人いるが、それぞれ別のところに家庭がある。母親は外出中のようで、ひとり居間にいた誠志郎は、手にしていた新聞をテーブルの上に置くと、陽香の話に耳を傾けた。動きはやや緩慢だが、年相応といえる程度で、長年使っている四角い眼鏡の奥の目には、

まだ十分に光が宿っている。

「なにか心当たりありますか、お父さん」

陽香は、よく似合う大きめの丸眼鏡に片手を添え、父の顔を覗き込んだ。誠志郎は首をひねり、考え込んだ。

鋼介がスクールにやってきたのは、創設から二年後の一九九〇年、四十一歳のときだった。当時、陽香は二十五歳で公立高校の教師だったが、聞かされたのは、南米で暮らしていた鋼介を父がスカウトしたということくらいで、以前のキャリアについてはなにも知らない。ここには不文律みたいなものがあって、スタッフも生徒も、ひとのことを根掘り葉掘り聞いたりしない。生徒の保護者からは入学の際に、不登校の理由などについてひと通りのことは聴取するが、本人からの聞き取りはしない。ただし、本人がしゃべり始めたら、親身になって耳を傾ける。結果、ほとんどの生徒とスタッフが、隠し事のない心の通い合う関係となっている。集団の中では、自分をさらけ出したほうが気がラクだし、スクールにはそうさせる雰囲気がある。ましてや、ここに集うものは世間一般から見ればはみ出し者。その共通項が一体感にもつながっているようだ。そんな中、鋼介だけは別で、本人は自分のことを語ったことがない。だから陽香は、断片的な情報と本人のイメージから、元JICA（以前の国際協力事業団）の職員ではないかと勝手に想像し、もし違っていてもそうはずれてはいないだろうと考えていた。

誠志郎の様子から、まったく心当たりがないわけでもなさそうだという印象をもった陽香だっ

たが、深くは問い詰めなかった。
「よくないことではないわよね」
「ああ、それはない。絶対に」
短いやりとりの後、誠志郎はガラス窓の外に目をやった。七月も半ばを過ぎたというのに、いっこうに梅雨が明ける気配がない。色あせた紫陽花が頭を垂れていた。

遊星学館の創設者である須藤誠志郎は、いまもオーナーと呼ばれている。来年には九十歳を迎える。かつて都内の私立中学校で国語の教師をしていた。一九八〇年代の半ば、児童・生徒の不登校が社会問題化したころ、彼は定年を待たずに学校を離れた。そして客観的な立場で教育現場を見直し、江戸時代の日本の私塾や、子どもの自主性と自由を尊重する海外の特徴ある教育メソッドについて研究を続けた。それらのエッセンスと須藤自身の教育理念とが縦糸となり、「大きな挫折感を味わったり、自分の居場所を失った子どもたちに、手をさしのべたい」という強い思いを横糸に、スクールというキャンバスが織られている。不登校の理由は一人ひとりちがうが、どんな子どもでも受け入れられて、自由な雰囲気の中で彼らが元気に楽しく、そして意欲的に、学習その他の活動に取り組むことのできる場所づくり、それに須藤は残りの人生を捧げることにしたのだ。
須藤家は代々地元の大地主で、所有していた広大な農地をつぶした敷地に、幹線道路に面する

別の土地を売却した資金で学校を建てた。苦労も多かったが、支援者に支えられてここまでやってきた。

遊星学館の最大の特色は「農」と「食」を重視している点だ。農園では、スクールをあげて作物作りに取り組む。果菜・葉菜・根菜類から、芋類・豆類、果物類、各種ハーブなど、年間を通して約四十種類もの作物を有機農法で育てる。また、新潟県の稲作農家と契約して無農薬、有機栽培の米を手に入れ、神奈川県の生協からは抗生物質を使わない産直の鶏卵や鶏肉、豚肉を買っている。つながりができた農家へは定期的に農業実習にも出かけていく。さらに、都下で里山の保全活動をやっているボランティア団体と連携して、年に一度、荒れ放題になっている竹林の伐採を行い、切り出した竹をオーナーが持つ奥多摩の土地へ運んで竹炭を作り、煙を冷却して竹酢(ちくさく)液も採る。竹炭はバーベキュー・パーティーなどをやるときの燃料にもするが、空気や水の浄化・消臭剤としても利用するし、竹酢液は薄めて農薬の代わりに野菜や果樹に散布する。

自然のサイクルを学び、伝統と最新科学に裏付けされた最良の方法で農作物を生産し、そこから得られるさまざまな食材を使って、昼食には安全で栄養価の高い食事をとる。栄養士の指導のもと、生徒自身が当番制で食事を作るのだ。昼食の時間もたっぷりとり、咀嚼(そしゃく)と唾液の分泌を重視して、食事中は水やお茶を飲まないよう指導している。それを家庭でも実践している生徒も多い。また、定期的な歯科検診と歯のメンテナンスも欠かさない。このような徹底した食育は、開校当時から学習の大きな柱として計画されていた。

11

「学校生活の本来の目的は、能力を伸ばし、心を豊かにすることだが、人間、まずは立派な体を作らなければならない。体作りのもとは正しい食生活。現在の日本の食生活は、一見豊かに見えて実はそうではない。非常に危うい状況にある。安全な食べ物を安定して得られることこそが大事だ。きみたちには、ほんとうに豊かな食とはなにかを、体験的に知ってもらいたい」

新入生に対して、オーナーは必ず一度はその持論を聞かせる。生きることのメカニズムを教え、次に生きる意味を考えさせるのが真の人間教育だと信じているからだ。本来は食育は家庭で行うべきものかもしれない。しかし、いまの多くの家庭にそれは期待できないから、それをやる場が必要である。こういった発想の原点は、オーナー自身の戦中戦後の体験にほかならない。

太平洋戦争前の須藤家は、土地の半分あまりを小作農に貸し、あとの半分ほどで自作していた。食料に不自由した時代も、肥沃な土地は多くの農産物を産み出し、大都市東京の住民の胃袋を満たす役割を果たしていた。戦後の農地改革によって、土地の多くは他人のものとなったが、それでも都内では指折りの大きな専業農家だった。

ところが、経済成長が続くにつれて、都市と農村の二極化が進み、しだいに都市農業が成り立たなくなってきた。さらに、農地と農家の減少、貿易の自由化などによって日本の農業は急速に変質していく。農産物、水産物、獣肉、飼料の海外からの輸入が増え、その結果、先進国の中では異常に食糧自給率の低い現状を生み出し、同時に、食品の安全性にも問題が生じるようになった。もちろん、消費者もだまってはいない。食の安全を求める運動が起こり、生産者の中にも高

い意識をもつ人が増えて、「スローフード」とか「地産地消」という言葉が使われ始めた。それに近いことを、須藤は創設当時から子どもたちに伝えてきたのである。

須藤はある仮説を立てていた。挫折を味わった子どもの自信を回復させるのに、農と食の組み合わせが効果的ではないかということだ。そして、長い間生徒たちと接しているうちに、それを実証することができた。自分の食べるものを自分で作ることによって、子どもたちは生きる自信を身につける。遊星学館の生徒たちは、食の意味を知るとともに、生きることの意義を実感する。また、食材にはそれぞれ最もおいしい旬のときがあり、しかも、そのときが栄養価も一番高いことがわかってくる。おやつや飲み物も自分たちで作るので、コンビニや自販機に走る子はほとんどいない。

もう一つの特色は、感覚器官を研ぎ澄ます鍛錬を取り入れていることだろう。さほど長い時間ではないが、一日に何度かさまざまな方法で視覚、聴覚、嗅覚、触覚を鍛える。ゲームに近いものもあって、子どもたちは実に楽しそうにその時間を過ごしている。日常以外でも、フィールドワークの際には自然の中で、作業やネイチャーゲームなどを通して五感をシャープにする。徹底してフィジカルな面を重視するのは、知を宿らせる身体は健康でなくてはならないというスクールの理念があるからだ。身体的に多少の欠陥をもつ生徒もいるが、個々の事情に合わせてベストを求めるのはいうまでもない。

また、これらの実践教育が融合する中で、思わぬ副産物もあった。それは料理を通した人間力

の育成だ。うまいものを作るために、生徒たちが真剣になればなるほど、彼らはまちがいなく成長する。料理はまず食材をよく吟味し、組み合わせや味付けを考えることから始まる。料理の基本を覚えながら、オリジナリティーも出すように知恵をしぼり工夫する。段取りをまちがえるとうまくいかない。調理時間、温度管理にも気を配る。味がいいだけではダメだ。見た目、香り、食感、ほんとうのうまさは、それらの相互作用によって生まれる。だから、五感をフルに活用しなければならないし、科学的な知識はもちろんのこと、計算力、分析力、想像力など、人間としてのさまざまな能力が要求される。

須藤は、うまい料理が作れるようになれば、生徒たちが社会に出たあとも、たいていの職場で能力を発揮することができるはずだと考えている。ものづくりの場ではもちろん、さまざまなプログラム作り、営業戦略の構築、システムを機能させるために人やものを配備する業務などの場で、きっと活躍できるはず。そして、ほぼ彼のイメージ通りの成果があがっている。

知育のほうは自学自習が基本で、一般の教科書も使わない。既成の教科そのものを学ばないからだ。子ども自身が勉強したいテーマを決め、スタッフの指導やアドバイスを受けながら、個人もしくはグループで研究したものをレポートにまとめる。最終的にできあがったものの評価よりも、そのプロセスを重視して、情報の収集、調査活動、集めた資料の分析に十分な時間を割く。スクール内の図書室に基本図書は一通りそろえてあるが、至近の距離にある市立図書館も利用するし、インターネット情報も最大限に生かす。ときには、オーナーの幅広い人脈を活用して、役

所や企業その他の団体に直接調べに行く。情報源は偏らないようにすること、アンテナを広く張ることも指導方針の一つだ。

小学校から高校まで、既成の教科にとらわれない「総合的な学習の時間」が導入されたのは二〇〇〇年ごろだが、遊星学館はそれを先取りしてやってきたようなものである。おもしろいことに、そのような先駆的な学習方法をとることによって、子どもたちは基礎学力の大切さを改めて感じるようになった。中学生の年齢にあたる子が小学校高学年の教科書を、高校生の子が中学時代の参考書を持ち込んで勉強している光景もたまに見かける。なにかに疑問をもち、その答えを得るための方法を学びながら、自分自身の力で納得できる答えに到達する。学習の基本的なプロセスとは、そういうものである。押しつけの教育、あるいは教えられるだけの受け身の学習をさせるのではなく、子どもたちが本来もっている能力を最大限に伸ばしてやることこそが学校の役割であるはずだ。オーナーもスタッフもそのことを強く肝に銘じている。

とはいえ、遊星学館は学校教育法に定められた学校としての要件を満たしてはいない。三十数年前に比べれば、不登校児童生徒に対する世間の見方が変わってきたのは事実だが、教育界の一部には、いまだに不登校者は怠け者であり、わがまま。社会に出ても役に立たないといった見方しかできない者がいて、フリースクールのことを差別的な意味を含めて「駆け込み寺のようなもの」と揶揄する。

しかし、オーナーは公然と「駆け込み寺でけっこう」と発言していた。学校や、ともすれば家

庭が、子どもたちにとって居心地のいい場所ではない場合がある。だったら、だれかか手を差し伸べてやらねばならない。まずは、どんな子どもでも受け入れられる場があることが大事であり、場所さえあれば必ず救済することができるという信念をもっていた。そして、確実に実績も積み重ねてきた。それなりに知名度も上がってきたので、遠方からの入学希望者も多く、定員五十名のところ、いつも十名近くはオーバーする状態が続いている。男女の比率は三対二といったところだ。

スクールの子の在学年数は平均三年。その後の進路はさまざまだ。家庭の経済的事情などから、それまで通っていた普通の学校に戻る子もいる。スクールの学費はけっして安くはないからだ。しかし、一度ここで過ごすことによって、たいていは不登校の原因が解消されている。

元の学校に戻らない場合は、さまざまに道が分かれる。高校生で入ってきた子の中には、高卒認定試験を受けて大学入試をめざす者がいるいっぽうで、専門学校へ進んで技術を身につけることを選ぶ者もいる。そのほか、他の学校へは行かず、スクールでの経験を生かして、和食や洋食の料理人になるため修業の道に入ったり、美術、音楽、演劇などのアーティストを夢見たりする者もいる。OB・OGの中には、一流レストランの人気シェフや売れっ子イラストレーター、ミュージカルのスター、テレビドラマの主役を演じる俳優など、名前を聞けばだれでも知っている者が何人もいる。

スタッフは、オーナーが七十五歳になった十四年前に、四十歳で代表を引き継いだ陽香のほか

に現在は五名。そのうち三名は教員免許をもっていない。

一人は副代表の桜場鋼介。とくに専門分野というものはないが、これだけ総合的な人間力を備えた人物は珍しい。広い知識と的確な分析力、判断力、そしてその指導力はだれもが認めている。古希が間近に迫ったいまも健康な体を維持し、颯爽と八〇〇ccのバイクで通勤している。

五十二歳になる滝川治（たきがわおさむ）は、かつてGKとしてオリンピック代表候補にまでなった元サッカー選手で、ケガのために若くして引退を余儀なくされた。プロ化をめざして実業団の各チームが強化を図っていたころ、あるチームにコーチとして招かれていたが、誠実な人柄とネームバリューを見込んだオーナーの熱心な要請で、スクール設立当初からスタッフとして迎え入れられた。スポーツ・トレーニングの基礎から、サッカーはもちろん、バスケットやテニスも教えている。また、彼の夫人は名の通ったシンガー・ソング・ライターで、公演の合間を縫って、月に一度か二度スクールを訪れ、ボランティアで音楽の特別講座をやってくれている。

安藤英二（あんどうえいじ）は三十九歳。大学時代の友人と始めた携帯電話のコンテンツ提供会社は、国内有数のIT企業に成長したが、金儲けのみに走る他の経営陣と衝突して会社と決別し、九年前に公募で入ってきた。コンピュータをはじめさまざまなデジタル機器の扱いに熟達していて、機械と共生する知的人間生活のあり方を自ら模索しながら、子どもたちに伝えている。

あとの二人も、教育現場の経験はあるものの、どちらかといえばドロップアウト組だ。椙山政幸（すぎやままさゆき）は中学校の英語教師をしていたが、女の子に性的いたずらをした男子生徒を張り倒して学校を

追われた。その後、子どものころからの憧れだったという遠洋マグロ漁船の乗組員になり、十年近くを海の上で過ごした。大いなる経験を積み、ひと財産を築いて陸に上がった六年前、新聞の公募を見てやって来た。年齢は四十八だが、鋼介と同じく独身である。

田中公則（たなかきみのり）は三十二歳で最年少だが、三人の子どもがいる。東京の公立大学を卒業後、都内の小学校に勤めたものの、都会生活が性に合わず、二年で辞めて福島の田舎に帰り、幼なじみと結婚して家の農業を手伝い始めた。ところが、農地の大半を公共事業にとられ、もう一度教育に携わりたいという気持ちが再燃したこともあり、大学時代の恩師に相談したところ、須藤を紹介されてその教育方針に心を動かされ、半ば押しかけるような形でスタッフに加わった。専門は国語だが、農業はお手の物だから、畑仕事を須藤父子や鋼介とともに指導している。

次の日、第二波の異変がダイニングルームで起こっていた。そこは正午から午後一時まで、生徒たちの昼食の時間に使用されたあと、一時半からがらりと姿を変える。おもに地域の住民を相手に、軽食と飲み物を提供するカフェとなるのだ。菜園で採れた数種類のフレッシュな野菜と果物のスムージーが人気で、そこそこ利益を上げている。

客の中には幼児を連れた若い母親が多い。今日も開店して三十分ほどが過ぎたころ、八卓ある六人掛けの丸テーブルは、半分近くがいつもの客で埋まっていたが、窓際のカウンターに並ぶ十脚の椅子の一つに、異質な客が座っていた。がっちりとした体をダークスーツに包み、明るいオ

レンジ色のネクタイを締めた男性。年齢は四十代後半といったところだろうか。七三に分けた黒々とした頭髪がそう見せているだけで、ほんとうはもっと年齢がいっているのかもしれない。面長でやや四角張った顔は、格闘技の選手をイメージさせる。ときどき腕時計に目をやりながら、スマートフォンをいじっていて、なにかのタイミングを計っている感じだ。

午後二時を回ったとたん、男は行動に出た。席に座ったまま、予めスマホに登録していたと思われる番号に電話をかけた。相手はすぐに出たようだった。

「先日お電話しました額田政経研究所の額田史朗と申しますが、桜場副代表はおいでになりますでしょうか？」

同じフロアの十数メートルしか離れていないスタッフルームで、電話口に出ているのは事務の女性だろう。その向かいの席に、出張から帰ってきて今朝から出勤している鋼介がいるはずだ。しばらく間があった後、出た相手を確認したうえで額田は言った。

「実はいま、勝手ながら学館のカフェのほうに伺っております。副代表のご都合がよろしければ、ここでご挨拶をさせていただけないかと考えているのですが」

言葉遣いは丁寧だ。一般的な作法は身につけていると思われ、胡散臭さは感じさせない。先ほどよりも長い間があった後、額田は満足そうな笑みを浮かべながら答えた。

「ありがとうございます。では、お待ちしております」

三十秒もたたないうちに、ダイニングの引き違いドアが開き、鋼介が入ってきた。額田はすぐ

に立ち上がり、鋼介と視線を合わせた。お互いに名乗りあい、カウンターの席を一つあけて着席すると、鋼介は渡された名刺に視線を落とした。中央に縦組みのゴシック体で「額田史朗」の四文字があり、左側に小さく「額田政経研究所」という事務所名と、住所、電話番号が小さな明朝体で印刷されている。

「で、どんなご用件で？」

少し間があった後、額田は切り出した。

「実は、ご協力をお願いしたいことがありまして。」

また間があいた。鋼介は相手の目を見据え、次の言葉を待った。

「以前、群馬の方で、ある調査をおやりになっていたはずですが」

鋼介の体が硬直した。

「私のところは一種の政治団体です。政治家へのアドバイスですとか、情報の提供を仕事としています」

瞬きをするのさえ忘れ、見開いたままの鋼介の目に警戒の色が宿っていた。十秒近い間があった後、少しかすれた声で、彼はようやく言葉を絞り出した。

「私がご協力できることなど、あるとは思えませんが」

「もう五十年近くも前のことと聞いていますが、お忘れになっているはずはありませんよね」

鋼介は視線を窓の外に移した。動揺を隠しているように見えた。そして、ふっと一息つくと、

表情を和らげて言った。
「せっかくいらしたのに残念だが、どうやら人違いみたいですね。私には心当たりがない」
額田は鋼介の横顔を見つめながら、落ち着いた声で言った。
「いえ、私は人違いなどではないと自信をもっています。これでもずいぶん調べたんですよ。時間がかかりました。そして、ようやくたどり着きました」
鋼介が視線を相手に戻した。しばらくの睨み合い。腹の探り合いとも言えるだろうか。額田が続けた。
「幕末の徳川幕府御用金、まだ眠っているのがあるのなら、世に出して役に立てるべきだと思いますが」
そして、周りに視線を走らせた後、声を落として言った。
「うまくいったら、お礼は十分にさせていただくつもりです。過去にいろいろないきさつがあったと聞いていますので。いえ、突然のお願いですからすぐにご返答いただけるとは思っていません。よくお考えください。また伺います」
額田は腰を上げた。そしてドアに手をかける前にふり返り、椅子に座ったままの鋼介に深々と頭を下げた。
ドアが閉まり、相手の姿が見えなくなると、鋼介はじっと目を閉じた。そのまま、二分か三分の時間が過ぎた。

21

「コースケ先生、野菜のスムージーでも？　それともフルーツミックス？」
いつのまにか、隣にテン子が立っていた。この日は一人で接客係をしていたようだ。スクールでは二年目になる生徒の一人。接客係は午後四時の閉店までの二時間半、日替わりで希望者が務め、わずかだがアルバイト料は出る。
「ありがとう。野菜のをお願いしようかな」
鋼介がにっこり笑うと、テン子はその何倍もの笑顔を返してキッチンに消えた。どんぐり眼で、見た目はとてもキュートな子だが、中身は強い意志のかたまりである。そのギャップがすごい。本名は梅宮天子（うめみやたかこ）。スクールではだれも本名では呼ばない。口が達者で突っ込みが厳しいので、男子の中には不用意に近づかないようにしている子もいるが、女子の多くからは頼りにされている。
「おまちどおさま」
再びテン子の明るい声が、鋼介の頭上から降りてきた。百円玉を三個渡して、鋼介はコースターごと飲み物を引き寄せ、自分の前に置いた。そして、盛り上がった緑色の細かい泡をじっと見つめた。

2

一九七二年三月――　大学卒業を間近に控えた二十二歳の冬。

ほぼ真西に向いたその斜面も、すでに暮色が濃くなっていた。風が横殴りに吹きつけ、粉雪が空中で渦を巻く。積雪は三〇センチを超えているだろう。条件は厳しいが、人目を避けての作業はこの時期にやるしかない。

一日で決着をつけるつもりだった。鋼介は、明け方から凍りついた地面と格闘を始めた。つるはしを打ち込み、五〇センチも掘ると、土は軟らかく生暖かさを感じるほどになる。だが、礫（れき）混じりの水分の多い赤土は重たく、作業は思うようにはかどらない。それでも、穴はすでに二メートルの深さに達していた。

たったひとりで自分の背丈よりも深い穴を掘るのは、想像していた以上に重労働だった。頭がかくれるほどになると、ショベルで土を放り上げるのが苦しくなる。そこで、壁にステップをつけ、ポリバケツに入れた土を持ち上げて一段上がり、地上に排出する。そのためのスペースを余分にとらなければならないから、排出する土の量は自然と多くなる。また、穴の周りにはすぐに土の山ができるので、ときどき地上に這い上がって、運び出した土を少し離れた場所へ移動する必要もある。

アノラックの内側は汗びっしょりになっていた。鋼介は、穴の底で一休みすると、次に壁の一

部にスコップを突き立てた。横穴を掘るつもりなのだ。その上方には、幅五メートルの砂利道が走っている。それは、群馬県沼田市から利根郡川場村を抜けて、片品村の中心地である鎌田に通じていた旧街道を整備したもので、冬期は積雪のために車の通行はほとんどない。

沼田から鎌田へ至るいまのメインルートは、白沢村、利根村を経て北上する国道一二〇号だが、昔は川場村を通るこの旧街道、すなわち武尊街道が主として利用されていた。鎌田は、日光へ向かう丸沼街道と、片品川沿いに北上して尾瀬沼の畔を抜け、檜枝岐から会津へ通じる道との分岐点で、二つの街道はともに徳川幕府にとって重要だったから、交通の要衝として栄えていた。この近くに、官軍の侵攻に備えて軍用金が運ばれてきた可能性は大いにあるし、二年間にわたる調査で、鋼介はその埋蔵ポイントを絞り込んでいた。

（たのむ、姿を見せてくれ）

穴の底にしゃがみ込み、祈りを込めてショベルを振るう。

およそ一時間後、横穴は奥行き一メートル近くまで掘り進められていた。午後七時を回り、日はとっぷりと暮れた。予定の時刻をとっくにオーバーしている。ホワイトガソリンを燃料とする、借り物のランタンの光だけが頼りだ。

突然、右の手のひらにこれまでにない感触が走った。ショベルの先に異物が当たったのだ。勢い込んでその部分を集中的に掘る。

（丸太だ！）

ライトを向けると、皮がついたままの松材の一部が見えていた。水平に埋め込まれているようだが、人工物と断定するのはまだ早い。それを見極めるため、露出した丸太を中心にして、土の壁をはぎ取っていく。すると、上にも下にも同じような丸太が重なっていることが判明した。どうやら木枠のようだ。胸が高鳴る。

丸太と丸太の間にわずかなすき間があった。そこから明かりを差し入れると、二、三〇センチの空間があるのが確認できた。そしてその先に、期待していたものが姿を見せた。黒ずんだ細長い木箱。それが何段かに積み重ねられている。総数まではわからない。

はやる気持ちを抑え、次の工程を必死に考えた。ここまできて土砂をかぶり、生き埋めになったのでは元も子もない。また、探し当てたものを効率よく運び出すため、土はできるだけ外へ出しておく必要があった。

さらに一時間ほど、単純な作業が続いた。さすがに疲労感もあったが、体は自然に動く。これまでのように、いつ終わるともわからない作業ではないからだ。ピリオドはまもなく自分の手で打つことができる。

スペースを広げると、慎重に木枠の取り外しにかかった。丸太はほとんど腐食していない。ようやく、上から五本を取り除くと、「宝庫」へ潜り込むのに十分な入り口ができあがった。ところが、なぜか突然、金縛りにあったように体が動かなくなった。目の前の空間に対して、いいようのない畏れの念がわいてきたのだ。あれほど執念を燃やし、やっとたどり着いたターゲットが、いま

25

まさに手の届くところにあるというのに、いったいどうしたことか。動悸が激しい。不可解な厳粛な気持ちに、身も心も支配されていた。

無呼吸状態がどれくらい続いていたのだろう。はっと我に返ったとき、自然と大きなため息をついていた。気持ちを切り替えるため、空間から目をそらした。泥だらけの軍手をはめた両手をじっと見つめる。手足はなんとか動きそうだ。軍手を脱いでアノラックと作業ズボンの泥を払い、タオルで額の汗を拭った。ついでに首の周りを拭き、胸元までタオルを突っ込んだ。

少しばかり気分が落ち着いた。もう一度、今度は意識的に大きく深呼吸をして、首をぐるりと回した。

「ようし」

思い切って声を出してみる。腹の底から絞り出したつもりが、喉元で引っかかり、かすれた。ゆっくりと視線を元に戻す。もう大丈夫だろう。上体を折り曲げ、ぎこちなく横穴の奥へ体を入れた。鼓動がさらに大きくなり、あたりに反響しているようだ。

その空間には、土の臭いに混じって、むっとするかび臭さが充満していた。四方に丸太が組まれ、同じように天井も覆われている。ライトを当ててもう少し詳しく木箱を観察した。角に金具のついたまったく同じ形の木箱が四列四段、合計十六個積み重ねられていた。鎌田に残る幕末の村人の目撃談と一致する数量だ。

恐る恐る手を伸ばし、脇のほうからなで回してみる。堅い木でできていてかなり頑丈そうだ。

錠前もついているが、それは錆びてぼろぼろになっているから、簡単に壊せるだろう。とりあえず、最上段の一個を捧げ持つような格好で慎重に下ろした。

（おや？）

思っていたより軽い。でも、こんなものか。なにしろ、千両箱を手にするのはこれが初めてなのだ。千両箱といっても、大きさは一定ではなく何種類かあったらしい。五百両入りの小型のものから、一万両も入る大型のものまで作られていた。細長い形状から判断すると、これはごく普通の、正真正銘一千両入りの金箱だろう。

手前まで箱を引きずり出し、つるはしの先を横向きにして、箱の側面についた錠前を思いきり叩いた。二度目でそれがはじけ飛び、箱がゆるんだように感じた。蓋に手をかけ、引き剥がそうとした。手が震える。心臓が喉から飛び出しそうだ。

ふと、頭上で物音がしたような気がした。まさかと思って顔を上げた。その目が強い光に眩んだ。

「なにをしている、そこで！」

鋭い男の声がした。予測もしなかった事態に、声も出ない。雪を踏む足音がして、さらに二灯のライトが頭上に増えた。

その日が三月十二日だったと鋼介は記憶している。問答無用といった感じで手錠をかけられ、制服警官一名と猟銃を手にした村人らしい男二名によって、初め鎌田の駐在所へ連行された。駐

在所では、氏名、生年月日、大学名、出生地、現住所をきかれたあと、仲間がいるのではないかと詰問された。いないと答えると、警察官は疑わしそうな目を向けたが、それ以上は追及せず、どこかとしきりに電話連絡をとっていた。しばらくして到着したパトカーに乗せられ、鋼介は前橋市内の県警本部に送られた。県警の留置場に入ったのは、午前零時を回っていた。

（なんだか、様子がおかしい）

鋼介は疑問を感じていた。無断で公道の脇を掘ったことについて、多少の罪の意識はある。厳密にいえば、刑法一二四条の［往来妨害］に抵触するだろう。道路の陥没など、実害を生じさせているわけではないが、未遂の場合も罰せられる。

ほかに考えられるのは、同二五四条の［占有離脱物横領］の罪だ。掘り当てた物件は、民法二四一条の定めによって、「遺失物法」という特別法の適用を受ける。発見者は、道で財布を拾ったときと同じように、発見から七日以内に、所轄の警察署長に届け出なければならない。警察は、公告の後、所有権者を探し、正当な権利のある者、つまり、埋蔵した者が特定できて、その相続権を証明できる者が現れた場合は、物件を返還し、発見者には五パーセントから二〇パーセントまでの報労金を請求する権利が与えられるだけとなる。所有権者が見つからない場合は、発見者と物件が掘り出された土地の所有者とで、折半して所有できる。

大学での専攻は民俗学だが、埋蔵物に関する法律については、行動を起こす前から知識として身につけていた。そして、この道の師と仰ぐ人物から、過去の成功した探索者のほとんどは、法

を無視して届け出を怠っていると聞いていたから、自分だけはそうはしないと心に決めていた。最初から警察に届けるつもりだったし、まだ七日の猶予があった。それなのに、手錠までかけられ、パトカーで県警本部に移送されるなんて、思いもよらないことだった。まるで凶悪犯のような扱いだ。ところが、不思議なことに、ここでは取り調べらしいものがなかった。それなのに、二日後には前橋地検に送検され、身柄は県警の留置場に置かれたまま十日間も勾留されたのである。

勾留期間中も、初日にたった一度、地検での取り調べを受けただけだった。五十過ぎと思われる顔色の悪い痩せぎすの検事から、鋼介は穴を掘っていた目的について問いただされた。彼は事実を語るべきかどうか迷った。発見したものの中身を確認していないのに、自分からそれを言うわけにはいかないと考えたのだ。そこで、しらを切った。

「地質調査です」

もし、警察の手で中身が確認されていれば、当然そのことが自分にも知らされ、その上で次の質問が浴びせられるはずである。だが、予想していた言葉はなにも返ってこなかった。

「ほう、地質調査ねえ。でも、大学は文系だろう？　専攻は民俗学ではないのかね」

すでに身辺調査をすませているようだ。鋼介は相手の顔をじっと見つめた。その表情からなにかを探ろうとした。

「個人的な趣味です」

返答しながら、目は軽く頷いている相手の顔からそらさなかった。青白い頬の一部にある髭の

そり残し以外に、表面的に観察できるものはなにもなかったが、検事が一種の戸惑いのようなものを内面に秘めていることが、なんとなく感じられた。鋼介は思い切ってたずねてみた。
「ボクが掘り当てたものはなんだったんでしょうか」
検事の頬がぴくっと動いた。視線は、スチールの机の上に広げられた、ほとんど白紙の状態の調書に注がれたままだ。鋼介の問いには答えず、検事はまったく別の質問をしてきた。
「キミは、極左活動に参加した経験は?」
「極左活動? そんなもの、ありませんが」
「極左でなくても、いわゆる学生運動とか、反戦デモとか」
「まったくありません」
今度は眉間にちょっと皺をよせて、検事はボールペンを調書の上に転がした。
「いいだろう。これで終わりとしよう。だが、もうしばらく、ここにいてもらうことになるよ」
(なぜだ)
鋼介はうんざりした。
「あのう、ボクは起訴されるんでしょうか」
まさかそんなことには、という期待を込めて質問したつもりだった。検事は、明らかに困惑の表情を浮かべた。
「さあ、まだなんとも」

言葉を濁す。質問をかわすのに精一杯の努力をしているように見受けられる。
県警と地検での不可解な取り調べについての疑問が解けたのは、勾留期限いっぱいの十日後のことだった。そして、想像もしなかった悲劇が自分の身の上に起こったことを知らされた。
その日の午前中、鋼介は県警の留置場から出された。そして地検へは向かわず、手錠も腰ひももなしで県警の中の一室に導かれた。革張りの応接セット、重厚な趣の木製のワークデスクなど、立派な調度品が配置された、取調室とはまるで違う温かい感じの部屋。本部長室だった。
一人掛けのソファが二脚あり、それぞれに年輩の男が座っていた。一人は年齢は五十代半ばと思われるが、髪は黒々として恰幅がよく、細い縦縞の入った紺のダブルのスーツを着込んでいる。もう一人は、和服に身を包んだ小柄でやせた初老の男だった。頭はほとんど禿げ上がっていたが、まだ六十歳にはなっていないだろうか。
鋼介を連れてきた制服警官が、深々と一礼をしてドアの外に立ち去った。
「まあ、掛けたまえ」
紺のスーツの男が、向かい合う三人掛けのソファを指差した。鋼介は無言でそのまん中に腰を下ろした。
「私は県警本部長の景山（かげやま）だが、キミは不起訴処分になった。まずそのことをお知らせしておく」
「はあ」

31

なんとも答えようがなかった。拍子抜けのようでもあるし、当然といえば当然である。そのまま黙っていると、和服の男が口を開いた。
「この十日間、キミはなにを考えていた？」
鋼介は答えず、男の目を凝視した。十日間の間に何度かそうしたように、問いかける相手の言葉や態度から、逆に自分の知りたいことを探り出そうとした。
（このじいさんがなにか知っている）
直感的にそう思った。名乗りもしないので、何者かはわからない。本部長の態度から推し量ると、警察関係者ではなく、別の世界のずっと格上の人物であるように思われる。
「ボクが掘り当てたものはなんだったんでしょうか」
相手はわずかに視線を泳がせたが、ちらりと本部長を見やったあと、しわぶきを一つしてぐっと身を乗り出してきた。
「なにを掘り出したと、キミは思っているのかね」
切り返されて、今度は鋼介が返答に窮した。沈黙の時が流れた。十五秒か二十秒くらいだっただろうか。先に口を開いたのは向こうだった。
「キミは木箱の中身を確認することができなかったようだね」
とたんに悔しさがこみ上げてきて、腹の底から声を絞り出した。
「その前に捕まってしまったから」

腕を組み、下を向いた。相手がすうっと体を引き、ソファに深く沈み込むのが気配でわかった。
「教えてあげよう。木箱の中に入っていたのはただの石ころだった」
（えっ！）
息をのみ、顔を上げた。男の目をじっと見据える。深い眼窩の奥で不気味な光を放つ少し白濁した双眸。うそではないように思えた。木箱を持ち上げたときの感覚が腕に蘇ってくる。あの重量は中に金貨が詰まっている箱のそれではけっしてない。
「そうでしたか」
言ったあとで、鋼介は少し素直な気持ちになっていることを自覚した。
「教えて欲しいのだが、キミはたまたまあれを見つけたのかね。それともなんらかの根拠があって」
「たまたまです」
鋼介は相手の言葉を遮った。
「取り調べのときにも言いましたが、目的は地質調査だったんです」
下を向いてそう言ったが、前にも増して相手の強い視線を浴びているのを感じた。またしばらく、沈黙の時間があった。
「そうか。じゃあ、石ころの詰まった木箱なんかには興味はないだろうから、あんな場所にはもう近づかんほうがいいな。念のために言っとくが、詮索も無用だ」
鋼介は押し黙った。返すべき言葉がまた見つからなかった。

33

「本部長、あのことは伝えておいたほうがいいな」
男が横を向いて言った。
「はっ」
本部長は背筋をぴんと伸ばして答えたあと、おもむろに鋼介に向き直り口を開いた。
「非常に気の毒なことだが、キミに知らせておかなければならないことがある」
何事かと、顔を上げ、鋼介は次の言葉を待った。
「ご両親が亡くなられた」
「えっ？」
思いもしない言葉に息をのんだ。まじまじと相手の顔を見つめた。両親？　二人とも？　なにかのまちがいだろう。そんなばかなことがあるものか。本部長はテーブルの上に置いた書類の下から一冊の週刊誌を取り出し、付箋のついたページを広げて鋼介の前に差し出した。見開きのページに躍る派手な見出しと写真が、鋼介の呼吸を停止させた。
――自殺か事故か！
極左グループ残党の両親中毒死の真相
そこに出ているモノクロの写真は、確かに鋼介の両親だ。だが、見出しの字句といったいどんな関連があるというのか。震える手でページをめくり、むさぼるように活字を拾う。二度くり返して読んだが、まだ腑に落ちない部分があった。それを察してか、本部長は用意していたと思わ

れる十日前の地元紙の社会面を広げた。トップで扱われているその記事を読み終えたとき、彼はこの十日間になにが起こったのか、ようやく理解できた。

前月の末、長野県南軽井沢のある会社の保養所に、管理人夫人を人質にとって、十日間も立てこもっていた極左グループの五名が逮捕された。それ以前の二月十六日から十九日にかけて、妙義山周辺と軽井沢で八名が捕まっている。武力革命という幻想にとりつかれて、銃砲店から銃器を奪い、銀行を襲って現金を強奪したり、火炎ビン・爆弾闘争を繰り返していた一味は、東京都内や神奈川県下などのアジトをアパート・ローラー作戦によって追われ、群馬県内の山岳ベースを転々としていたのだ。

そこまでは鋼介も知っていた。また、彼らの山岳ベースがあった場所と、鋼介がこの二年間通い詰めた山とが、偶然とはいえ一致していたことに戦慄を覚えていた。妙義、榛名はくまなく歩き回り、慣れ親しんだところだったし、迦葉山（かしょうざん）に近い赤城、子持、武尊の山々も調べ尽くしている。前年の暮れに、榛名湖の近くの山中で出会い、さらにひと月ほど前にも妙義山麓の洞窟で遭遇した若者が、南軽井沢の保養所で捕まった五人のうちの一人だったことは、テレビの中継で確認している。

多くの国民と同じように、鋼介も南軽井沢ですべてが終わったと思いこんでいたのだが、実はそうではなかった。逮捕後の自供により、彼らが「総括」と称して凄惨な同志リンチを行ってい

35

たことが判明したのである。前年十二月末からこの年の二月にかけて、「共産主義化」できなかった革命戦士が仲間から激しく殴打され、厳寒の山中にさらされて死んでいった。その数は女性四名を含む十二名。二十一歳から二十八歳までの若者たちだった。

まず三月七日、妙義山の洞窟で男性の遺体一つが発見された。そして十日、国道一二〇号に近い白沢村の山中に埋められていた三体が掘り出された。これは、一月中旬から二月中旬まで彼らがこもった、迦葉山のベースで殺されたものらしい。続いて十一日から数日間の間に、榛名山ベースに近い倉淵村で、八名もの遺体が発見される。

この大量殺戮のニュースは、国民に大きなショックを与えていたが、鋼介はまったく知らなかった。なぜなら、彼は二年間の調査でたどり着いた仮説を自らの手で実証するために、三月七日から東京の下宿を離れ、ワンボックスのレンタカーに寝泊まりしながら、群馬県片品村に滞在していたからである。そして一週間近く、新聞も読まなければ、カーラジオを聞くこともなかった。それほど、調査に集中していたのだ。

白沢村で遺体が発見された三月十日以降は、三つの山岳ベース周辺で、警察官を総動員し、民間人の協力も得て、大がかりな山狩りが展開されていた。まだ残党がいる可能性もあったからで、それに鋼介は見事に引っかかったのだった。年齢的に極左グループのメンバーに近いし、山狩りに動員された警察官や民間人が、先入観から彼を一味とみたのももっともなことではある。

だが、鋼介にとって不幸だったのは、マスコミさえもが先入観というより決めつけて報道した

ことだった。

――南軽井沢の極左グループの残党を群馬山中で逮捕

各紙はほぼ同じような見出しで、雪深い片品村で穴を掘っていた若者を捕まえたことを報じていた。実名はもとより、あとで知ったのだが、全国紙の何紙かは顔写真まで掲載していた。鋼介の生家は大分県の日田市にあるが、両親が記事を読まないはずはなかった。

読まされた週刊誌によると、両親は三月十三日以来一歩も外へ出ず、雨戸を固く閉ざして家の中に引きこもっていたらしい。三日後に、心配した近所の人が警察に届け、勝手口をこじ開けて家の中に入った警察官が、居間の炬燵に入ったままうつぶせになって死亡していた二人を発見したのだという。炬燵の熱源は鋼介が子どものころからずっと練炭火鉢だった。警察は死因をその練炭の不完全燃焼による一酸化炭素中毒と断定したが、遺書もなく、食事の支度もしてあったことなどから、事故死との見解を発表しているものの、自殺の可能性もあると付け加えていた。

（絶対に自殺なんかではない！）

鋼介は確信していた。居間の気密性が高まったために、一酸化炭素がこもってしまったのだ。小学校の校長を務めていた父親が退職したのは数年前のこと。その後は年金暮らしだから、けっして豊かではないが、かといってさほど貧しいわけでもない。だのに、父親が頓着しないものだから、家はいつまでもみすぼらしく、母親は常にそのことを嘆いていた。ようやく前年の暮れになって、居間と寝室の窓をアルミサッシに換えた。そのことを報告かたがた、母親が鋼介の下宿

に電話をかけてきたのはクリスマスを過ぎたころだった。
「鋼介、暮れには帰っちくるんかえ？　窓をサッシに換えちょるき、この冬はもう昔のごとすきま風で寒か思いをすることはなかよ」
嬉しそうな母親の言葉が蘇ってくる。なんと皮肉なことか。すきま風の入るボロ家だったら中毒死することなどなかったのに、気密性を高めたことが仇になってしまったのだ。
群馬県警の本部長室のソファに座ったまま、しばらくは身動きすることもできなかった。不思議と涙は出てこない。その代わり、腹の底からマグマのように噴き出してくる怒りと悔しさが、いまにも全身の皮膚を内側からびりびりに破ってしまいそうだった。
「今朝、キミが極左グループとは無関係だったことを報道関係にも伝えたから、夕刊に訂正の記事が載ると思うよ。逮捕直後に、なんというか、見込みだけで、キミがその、やつらの一味のようなニュアンスでマスコミに対応したことを申し訳なく思っている」
なんの慰めにもならない本部長の言葉を、うわの空で聞いたあと、鋼介はやっと身を起こした。
「車は裏の駐車場にあるから」
出口に向かおうとした鋼介の背に、本部長の言葉が届いた。振り返りもせず、ぼそっとつぶやいた。
「置いていきます。料金を払っておいてください」
本部長はなにも言わなかった。地元で借りたレンタカーの返却期限はとうに過ぎている。延長

料金だけでもかなりの額になっているはずだ。少しは腹いせになっただろうか。
それからのことを鋼介はよく覚えていない。前橋駅に向かい、キヨスクで何種類かの週刊誌を買い、上野行きの鈍行に乗り込んでそれを読みあさったところまでは記憶があるが、止めどもなく涙が溢れ、座席にうずくまって身を震わせているうちに、いつの間にか眠ってしまったようだ。上野から下宿のある中野区の沼袋まで、どのような経路をたどったのか、ともかくも帰り着くことはできた。賄い付きの下宿の世話好きのおばさんが、彼の顔を見ると、飛びついてきた。
「やっぱりなにかのまちがいだったんだよね。でなきゃ、帰ってこられるわけないもんね。あたしは信じてたよ、警察がうちにも来たけど、桜場さんはあんなやつらの仲間じゃないって。でも、ご両親のことはなんと言ったらいいか。気の毒なことだったねえ」
一気にそれだけ言うと、顔をくしゃくしゃにして大粒の涙を流し始めた。自分の母親と同じくらいの歳に見えることもあり、つられて鋼介も声を上げて泣いた。
それから三日間、鋼介はなにもせず、ほとんどの時間をふとんの中で過ごした。食欲はなかったが、朝食と夕食の時間になるとおばさんが呼びに来るので、仕方なくごそごそと起き出して食堂へ行き、出されたものの半分くらいを口に運んだ。地方出身の学生だけの下宿屋で、住人は八人。大学は休みに入っているので、そうやって食事をとるのは鋼介だけだった。いろいろと気を遣ってくれるおばさんに、初めは感謝の気持ちを抱いていたが、そのうちうっとうしくなって、しだいに口もきかないようになっていった。そのおばさんにせっつかれて、横浜にいる叔母に電話し

39

たのは帰ってきて四日目だった。母親の妹、ただ一人の親戚。一人っ子の鋼介にとっては、両親が亡くなったいま、ごくわずかな身内だった。その叔母が、帰ってきたら電話をするよう、下宿のおばさんに言伝を頼んでいたのだった。

電話口に出ると、叔母は、

「鋼ちゃん」

と言ったまま黙り込んだ。しばらくして嗚咽が聞こえてきた。代わりに叔父が出た。中央官庁の役人で、いつも威張っているような態度が子どものころからいけ好かなかった。

「鋼介か。いったいどうなってるんだ。こっちの身にも火の粉が飛んできたんだぞ。マスコミの連中を追っ払うのにどんなに苦労したことか」

叔母の「あなたやめて」という声が聞こえた直後に、鋼介はなにも言わず受話器を下ろした。

両親の葬儀はとっくに終わっているはずだった。本来ならすぐに郷里へ帰り、墓参りをして家の整理もしなくてはならないところだが、鋼介はまったく動く気持ちになれなかった。

大学の卒業は決まり、四月からの就職も内定していた。東京都内のある博物館。学芸員として資料の整理をしながら、二年間取り組んできた個人的な研究も続けていくつもりだった。だが、もうそれもできるはずがない。自分の身の置きどころがなくなってしまった。現実世界から逃避したい。そんな衝動に駆られていた。

結局、博物館には内定辞退の電話を一本入れ、選択した道は海外渡航だった。中学・高校時代の同級生で、大学二年で中退して南米のコロンビアに渡った山下哲哉（やましたてつや）が、人捜しをしていると聞いていたからだ。彼の父親の兄は戦前に移住して農園を営んでいた。それがだいぶ大きくなってきたらしい。二十五歳で結婚してすぐに海を渡った伯父さんはもう五十八になるが、子どもがなく、哲哉は三人兄弟の二番目だったので、跡継ぎとして呼び寄せられたのだった。

電話番号は半年ほど前に届いた絵はがきに記されていた。哲哉ははじめ怪訝そうな様子だったが、正直に事情を話すと、鋼介に同情を寄せながら、最後は「これ以上の助っ人はいない」と、大喜びしてくれた。

日本から一万七千キロも離れた赤道直下の国。どんなところか想像もつかないが、それだけに、この日本で自分の身に起きた出来事を忘れさせてくれるにちがいない。向こうでなにかをやるというより、心の洗濯が主目的だった。先方から労働契約書を送ってもらい、就労ビザをとって現地に飛ぶと、到着した翌日から早速仕事にとりかかった。見晴らしのいい山腹に建てられた二階建ての瀟洒な木造住宅。伯父さんは鋼介のために十畳ほどのゆったりした部屋を用意してくれていた。

コロンビアは日本の国土のおよそ三倍の面積をもつが、ほとんどが山岳高原地帯で、昭和初期に始まった日本人移民は、当初稲作を試みたが成功しなかった。そこで、トウモロコシや綿花、ソバ、コーヒー、ウズラ豆などを試作した結果、ウズラ豆が気候風土に合っていたようで、以後、

41

日本人移民の主要産物になる。哲哉の伯父さんは、昭和十四年に入植して、初めはウズラ豆の栽培を行ったが、価格の変動で痛手を被り、コーヒーの栽培にシフトした。初期の移民でコーヒーで成功した先達がいたからだ。

この国の山岳高原地帯は、コーヒーの栽培に向いている。世界最高の品質を誇り、特に日本人に好まれるブルー・マウンテンは、コロンビアの北方約八〇〇キロのカリブ海に浮かぶジャマイカ島の標高八〇〇メートルから一二〇〇メートルにある指定地域に産する。強い太陽光と昼夜の大きな温度差が良質のコーヒー豆を育てるのだが、コロンビアにも地形と気候がそれに似たところがある。エクアドルとの国境に近いナリニョ県の山間の村に、伯父さんはそのような場所を手に入れ、大きな農園を開いていた。

現地の五家族を労働力として雇い入れ、人出は十分にありそうだったが、コーヒー園の仕事はなかなかの重労働だった。第一に、急峻な斜面に農園があることから、畑仕事に通うこと自体がたいへんである。そして、収穫時には赤いコーヒー豆でいっぱいになったひと抱えもある籠を、一日に何度も作業小屋まで下ろさなくてはならない。これに活躍しているのが、日本のみかん畑で導入されるようになった農業用モノレールだ。約二〇〇キロの運搬能力をもつモノレールは、作業の効率化に大いに役立っていた。

また、農園で乾燥、精選の工程を経た豆は、港の近くにある集荷場まで運ぶのだが、途中悪路が多いので、トラックより二輪車の方が運びやすい。そのため、その農園には大型の二輪車五台

が常備されていた。鋼介のおもな仕事は、その二輪車とモノレールの整備と運転だった。小型エンジンのついた乗り物や機械に強いことは、哲哉もよく知っていたからだ。

少しずつスペイン語も覚え、労働者の家族とも仲良くなっていった。二輪車の故障を手際よく直し、いつも最高のコンディションにキープする鋼介を、彼らは信頼してくれ、特にトラブルのようなこともなく、平穏な時が過ぎていった。

忙しくも楽しい日々が、まさに薄紙を剥ぐように日本での出来事を忘れさせてくれた。それでも、完全に忘れることができたわけではない。夜、一人でベッドに入ると、頭上からライトで照らされ、穴の中でうずくまる夢を幾度となく見た。夢を見ないようにするためには、昼間働くだけ働き、疲れ切ってベッドに入るのが一番だった。疲れを感じないときは、ＰＯＫＥＲという地元のビールを飲み、努めて酔うようにした。その心の封印が、一気に解けてしまいそうになったことが一度だけあった。

コロンビア移民で最も成功した日本人の家に招かれたときのことだ。和歌山県出身の辻壱之助（つじいちのすけ）氏は昭和初期に入植したが、日本の外務省が用意したのはとんでもない不毛の土地で、稲作はおろか他の作物もほとんど育たなかった。他の国でも同様のことが起こっていることは耳に入っていたので、早々に農業に見切りをつけ、首都ボゴタの近郊で自転車の修理屋を始めた。それが軌道に乗ると、リヤカーの製造販売に手をつけ、これが大当たりして財を築く。そして、かねてから計画していたコーヒー農園の経営に乗り出し、瞬く間に国内有数の農園のオーナーにのし上

43

がったのである。

辻氏の邸宅は、一〇〇ヘクタールを超える広大な農園を見下ろす小高い丘の上にあった。日本の城の天守閣を模したと思われる三層の建物の内部に案内され、奥の一室に入っていくと、正面に高さ一メートルほどの金箔を貼った阿弥陀如来が鎮座する須弥壇(しゅみだん)があった。けっして趣味がいいといえるものではなかったが、度肝を抜かれていると、同じ部屋の片隅に置かれた金属製の大金庫を開けて、中のものを見せてくれた。鋼介ははっと息をのんだ。金具で補強された頑丈そうな木箱。まさしくそれは、彼があの日見つけた千両箱と同じものだった。

辻氏はにこやかにほほえみながら、錆び付いた錠前を開けた。半分ほどは和紙に包まれたままだったが、整然と積み重ねられ、山吹色の鈍い光を放つものは、紛れもなく小判だった。数枚手に取ってみたが、その感触からすると本物であることは疑いようがなく、裏には一様に草書体の「文」の刻印が打たれていたので、江戸時代後期に鋳造された「文政(ぶんせい)小判」別名「草文(そうぶん)小判」であると思われた。

「ちょうど千枚、つまり千両入っていますよ」

と、辻氏は得意げに言った。どこで手に入れたかはわからなかったが、地元の人たちには、昔の日本で殿様か大商人しか持つことのできなかった品であると説明して、自慢していたようだ。誇り高き日本人の辻氏にとってみれば、これ以上ない富の象徴だったし、資産価値を見込んでの保有とも思われた。

鋼介がコロンビアに渡って五年たったころ、哲哉は幼いころから近所付き合いをしていた家の娘を呼び寄せ結婚した。二歳年下の彰子（しょうこ）は明るくて人なつっこく、哲哉とお似合いだった。幼なじみとして気を許しあった仲だからか、遠い異国の地で家庭を持つことに、なんの心配もなさそうだった。それを鋼介はうらやましく思った。同じころ、哲哉からいい人がいるからお前も嫁さんをもらったらと勧められたが、鋼介は笑って首を振った。そのときはどうしてもそんな気にはなれなかったからだ。

彼にとって初めての女性は、それから二年後に知り合ったカロリーナという現地の娘だった。ナリニョ県の中心地であるパストの銀行に勤めていたカロリーナとは、哲哉の代わりに金を預けに行ったときに知り合った。コロンビア人の七〇パーセントはメスティーソと呼ばれる白人と原住民との混血だが、彼女もその一人だった。艶やかな黒い髪、褐色の肌、くっきりとした二重まぶたの大きな目に黒い瞳。典型的なコロンビア美人だった。鋼介より五歳若かったが、地元では結婚適齢期を過ぎていたこともあり、約半年の交際が続いたあと、周りの勧めに従って結婚することになった。

農園の経営は順調で、鋼介も含めたヤマシタ・ファミリアは幸せな日々を過ごした。しかし、鋼介自身の幸せは長続きしなかった。カロリーナは生まれつき心臓に欠陥があり、そのため子どももつくらないようにしたのだが、結婚して八年目、彼女が三十三歳のとき、医師から手術をし

45

ないともたないという診断が下されたのだ。首都ボゴタの病院で手術を受けたが、術後、医師の口から出た最初の言葉は「ロ・シエント・ムーチョ（とてもお気の毒ですが）」だった。三十八年の人生で二度目に味わう深い悲しみ。鋼介はまた一つ大きなものを失った。

カロリーナの葬儀があわただしく終わって、ふと我に返ったとき、鋼介の脳裏に急に両親の顔が浮かんできた。あれから十五年たつというのに、まだ墓参りもしたことがない。パスポートの更新のため一時帰国した五年前も、日本滞在はごく短期で、郷里の日田に足を運ぶことはなかった。自分だっていつ異国の土地で果てるかわからないし、一度くらいは両親の墓前で、結果として親不孝をしたことを詫びなければならないのではないか。そう考えると、居ても立ってもいられなくなった。コロンビアに渡って以来初めての、ひと月ほどの長期帰国を申し出ると、哲哉も伯父さんも鋼介の心情を察して「ぜひそうしなさい」と、快く送り出してくれた。

粉雪の舞う成田空港に降り立ったのは一九八七年二月末のこと。コロンビアへ向けて出発したのは羽田だったが、前回の帰国の際は、開港からまもない成田に着いた。そのときは夏だったから、雪景色を見るのも実に十五年ぶりになる。ふと、頭をよぎる光景があった。

成田から国内線の福岡行きに乗り、福岡空港からは高速バスで日田へ直行した。ボゴタを出発してまる一日以上かかってたどり着いた故郷は、想像していたほど様変わりしてはいなかった。五年前には、かつて住んでいた東京・中野周辺の変貌ぶりに目を見張らされたので、日本全国どこでもそうだろうと思っていたのだが、バスが到着した駅前の通りに並木道ができて、きれいに

整備されていることが目についたくらいで、どこを歩いても道に迷うことはなかった。
ただ、自分にとって最もかけがえのないものが、跡形もなく消え失せている現実を突きつけられたとき、鋼介の胸は張り裂けそうになった。彼が生を受け、十八年間暮らした家だ。両親がいなくなったあと、地元にはもう血のつながった親族はなく、しかも、ああいう「事件」のあった家だから、借り手がつくはずもない。もともとがボロ家だったし、朽ち果てて敷地全体がヤブになっていても仕方がないとは思っていた。ところが、目にしたのは廃墟となったわが家ではなく、それがどこにあったのかさえわからないほど、きれいさっぱり消え失せた異次元の空間だった。鋼介の勉強部屋兼寝室や、ちゃぶ台を囲んで親子三人で食事をしていた居間、あるいは、捕まえてきたドジョウやフナを飼うため、庭の片隅に作った小さな池。食卓に上がる野菜類の半分以上を産した畑、かつては確かに形のあったものが、いまは彼の記憶の中にあるだけ。そこには片道二車線の新しい道路が走り、トラックや乗用車が往来していた。空白の時が、すべてを洗い流してしまったのだ。
視界がにじんでいくのと同時に、口の中でふとあの味がよみがえってきた。畑の片隅にあった小さな桃の木。実もたいして大きくはならず、甘くもなかったが、時季が来ると母がそれを刻んで甘く煮たものを、寒天で固めてくれた。冷蔵庫はなくても、くみ上げたばかりの井戸水で十分に冷えた。あの井戸もアスファルトの下なのだろうか。
鋼介の生家は、日田市北方の花月（かげつ）川を渡ったところにあった。川を挟んで対岸に菩提寺が見え

47

る。勇気を出して寺へ行くことにした。本堂の裏手に回り、整然と並んだ墳墓の間の小径を進んでいくと、見覚えのある小振りの石塔に行き着いた。恐る恐るその側面をのぞき込む。祖父母の名に並んで、それよりもややくっきりと両親の俗名が刻まれていた。そしてその下にあるまったく同じ命日は、すでに半分以上が苔に覆われていた。鋼介の口から嗚咽が漏れた。荒い呼吸をおさえて、震える手でなんとか線香の束に火をつけて立て、手を合わせてじっと目を閉じる。熱いものが頬を伝って流れ落ちた。

さまざまな思いを胸に、市街地へ向かってぶらぶら歩いているうちに、いつの間にか「秋風庵」にたどり着いていた。高校から近かったこともあって、かつては用がなくてもよく足を運んだ。心の落ち着く場所だったからだ。

幕末近くに地元出身の広瀬淡窓が開いた私塾「咸宜園」の跡で、昔の建物の一つを復元したのが「秋風庵」だ。「咸宜」は「みなよろしい」とも読み、三つの意味が含まれていた。まだ封建制の時代であったにもかかわらず、身分、年齢、性別に関係なくだれでも入塾できること。学問は偏ることなく広く学ばなければならないこと、そして、なによりも塾生の個性を尊重することが、淡窓の教育方針の柱だった。全国六十八カ国中六十六カ国から若者が集まり、儒学をはじめさまざまな学問を学び、淡窓亡きあとも子や弟子に引き継がれ、明治三十年の閉塾までの入塾者は四千八百人に達し、その中には高野長英、大村益次郎、清浦奎吾らがいた。

淡窓が残した言葉で、鋼介が最も感銘を受けたのは、「鋭きも鈍きもともに捨てがたし錐と槌

とに使い分けなば」だ。人にはそれぞれちがった能力があり、鋭い頭脳の持ち主もいれば鈍い者もいる。しかし、鋭い者だけが世の中の役に立ち、鈍い者は役に立たないかというと、そんなことはない。それぞれの個性と能力のちがいを生かす使い方をすれば、役に立たない者などいないという意味である。高校時代から、なにかに行き詰まったり自信がなくなったりしたとき、鋼介はいつもこの言葉を思い出しては自らを奮い立たせた。

古井戸のある庭先にたたずみ、十代のころの思い出に浸っていると、少しずつだが気分が落ち着いてきた。空気は冷たかったが、よく晴れた穏やかな天気だった。

人の気配がしてふと背後に目をやった。きちんとした身なりの中年の紳士が縁側に立ち、庭を眺めている。目が合ったので軽く会釈をすると、向こうから声をかけてきた。

「どちらからいらしたんですか」

右肩にデイパックを引っかけていたから、旅行者に見えたのだろう。実際そうなのだが。

「はあ。もともとこちらの人間なのですが、いまは南米に住んでいます」

「南米ですか。それはそれは」

予想もしない答えだったらしく、紳士は目を丸くした。

「南米といっても広いですが、どちらかな？」

「コロンビアです。パナマと隣り合う、大陸の北側の入り口に位置する国です」

「ほう、コロンビアねえ」

49

その答えも意外だったとみえ、紳士はいろいろなことを聞いてきた。好奇心も旺盛らしい。聞くだけではなく、自分のことも問わず語りに話し出した。

紳士は東京の人で、中学校の国語の教師を定年前にやめて、いまは自分の学校をつくる準備中だという。参考にするために、西日本に残る江戸時代の私塾の跡を見て回っているそうで、萩の松下村塾、長崎の鳴滝塾を経て、ここへたどり着いたと説明した。

「前々から一度訪ねてみたかったのですよ。ここは私が理想とする学校のスタイルに近い。スタイルもいいが、導くほうも学ぶほうも、みな崇高な志をもっていました。そんな私塾が、幕末の日本にあったということがまた驚異です。明治維新後に日本にやってきた欧米人が、日本人の教養の高さに驚いているんですが、ここを見るだけでもさもありなんと思いますよね」

紳士の言葉に、鋼介はまるで自分がほめられているような気分になり、頬をゆるませた。

（いまどき、こんな熱血先生がいるとは）

自分を含めた団塊の世代が社会に巣立ったあと、膨張した高校や大学は質よりも量を優先するようになった。男子も女子も高校や大学へ進学することがごく当たり前のことになり、学歴社会の変質が起こった。そして、経済の膨張が続き、ここのところ日本中が「バブル景気」といわれる異常な好況に沸いている。拝金主義がもたらすひずみが、社会のさまざまなところに出てきていることは、南米へも伝わってきていた。学生が希望する就職先は、一にも二にも給料の高いところ。鋼介が卒業するころは、金融関係などは仕事で大きな金を扱うだけで、給料はたいしてよ

くなかった。それがいまやトップレベルの給料で人材を集めていて、文系の優秀な学生はもとより、理工系の学生までもが銀行や証券会社、保険会社などへ流れていくと聞いていた。教職の仕事などは、学生の選択肢の中ではかなり低いところにランクされる傾向にあった。

学校現場、特に中学校の荒廃が各地で起こっている原因として、親が金儲けに走って子どもの教育に無関心なことや、偏った食生活からくる心身の不健康などもあげられているが、まちがいなく教育現場に人材が不足していることもある。

鋼介自身、けっして教育というものに関心があったわけではない。しかし、遠く離れた国まで届いてくる母国の憂うべき現状に、少なからず心を痛めていたときでもあったし、それまで胸の内にしまっていたことを、この紳士の前で自然と口にしていた。

「少し前から、日本人の劣化が始まっているように思います」

紳士は鋼介の顔をじっと見据え、しばらくは押し黙ったままだったが、ゆっくりとそして大きくうなずいた。

「やっぱりそう感じますか」

咸宜園の精神を受け継ぐ学校をつくろうという人だから、きっと考えは同じだと思っていたのだが、当たっていたようだ。そのあとは、実際どんなことをしゃべったのか、はっきりとは覚えていない。コロンビアの教師の地位や処遇、昔の日本の教師はいまよりずっと尊敬されていて、それなりに威厳があった。いまは教師より保護者のほうが偉ぶる風潮があり、学校に的外れのク

51

レームをつけてくる親がいる。とんでもないことだ。政治の世界では相変わらず世襲が当たり前のようになっているし、就職の際にはコネが通用する。先進国の仲間入りをしたといっても、科学技術や工業生産が世界のトップレベルになっただけで、国民の品性やモラルは幕末に比べると退化しているかもしれない。などというような話だったように思う。気分は高揚したまま、時間がたつのも忘れて心中を吐露していたようだった。ただ、自分が発した最後の言葉だけは、はっきりと覚えている。

「劣化を食い止める方法は、教育しかありません」

別れ際に、紳士は自分の名刺を差し出した。肩書きはなく、須藤誠志郎という名前と連絡先だけが刷り込まれていた。鋼介がいまだかつて名刺というものを持ったことがないと言うと、須藤はにっこり笑って自分の手帳を広げ、ボールペンを握らせた。促されるままに、名前とコロンビアの住所と電話番号を書いたが、単に礼儀のつもりでそうしただけで、数年後に須藤と深いつながりをもつことになろうとは、そのときは夢にも思わなかった。

須藤からの最初の手紙が届いたのは、それから一年と少したったころだった。鋼介はもちろん彼のことを覚えていたし、故郷のことを思い出すきっかけができたことを嬉しく思った。計画がなんとか順調に進んでいるという報告のみで、それ以上の具体的なことは何も書かれていなかった。鋼介は、自分も相変わらず元気でやっているので、ぜひ目標に向かってがんばってください

と、激励の返事を出した。

すると、まもなく二通目の手紙が届き、それにはフリースクールを開設したとあった。初めて目にする言葉に、鋼介は首をひねったが、それがいまの日本に必要だから、全財産を擲(なげう)ってその事業をスタートさせたと結ばれていた。学校を作るには相当な資金が必要なはず。いったいどれくらいの財産があったのだろうかと、鋼介の思考はあらぬ方へ向いた。

須藤がつくったフリースクールというものがどんなものかがわかったのは、三通目の手紙を受け取ったときだった。日本ではいま、不登校の中高生が増えているという状況説明から始まり、どんな子どもでも受け入れることができて、楽しく有意義な学校生活を送ることができる場にしたいと、夢のような構想が熱い思いのこもった言葉で綴られていた。素晴らしいことではないか。そこで、前よりもさらに心を込めて激励の返事を書いたが、まだこのときも、自分には縁のない遠い世界のことという認識しかなかった。

ところが、次の手紙に予想もしなかったことが書かれていた。鋼介を学校のスタッフの一員として迎え入れたいというのだ。教師の資格も経験もない自分に、とうてい務まるはずがない。鋼介はあわてて長い返事をしたためた。自分の生い立ちから、今日まで身の上に起こったことを包み隠さず文章にした。紙の上だから書きやすかったのだろう。南米と日本の距離も、抵抗感をなくすはたらきをしたかもしれない。初めて他人に打ち明ける内容も含んでいた。申し出はありがたかったが、それを断る理由にするつもりだったのである。

53

しかし、須藤はあとに引かなかった。そればかりか、間を置かず届いた手紙では給与などの具体的な待遇まで示し、鋼介を選んだ理由が説明されていた。最大の理由は、受け入れる子どもが規格外であるから、指導する側も規格外の人間でないと務まらない、純粋培養の教師は自分がつくった学校には必要ないというのだ。

鋼介は迷った。学校が自分とはまったく無縁の場所という考えが変わらなかったなら、固辞するしかなかったが、須藤の手紙を読んでいるうちに、心に微妙な変化が起きた。日田の咸宜園でのやりとりもよみがえってきて、あのような主張をしてしまった手前、このまま逃げてしまうのは卑怯のような気もしてきた。もしかしたら、自分にも何かできるかもしれない。

農園の仕事は順調で、ここでの暮らしにはなんの不満もない。ただ、歳をとった哲哉の伯父さんが第一線から身を引いたあと、哲哉がファミリアの親方となったが、船頭が二人もいるのはいいことではない。それもあったから、この国の永住権はとっていない。初めは心の洗濯のために勝手に押しかけたのだし、手伝いになればというくらいの軽い気持ちしか持ち合わせていなかったのに、すでに十八年が過ぎ去っていた。少し長居しすぎたかもしれない。

（日本に帰ろう）

そう心を決めた。咸宜園の開塾者、広瀬淡窓が残した言葉をもう一つ思い出し、それに後押しされた。

――人材を教育するのは善の大なるものなり

鋼介の父親は教育者だった。その背中を見て育ったが、父親と同じ仕事に就こうと思ったことはない。なぜか気恥ずかしさがあったからだ。しかし、いまは明らかに気持ちがちがってきていた。やはり父親から受け継いだ血が流れているからだろうか、それとも、いろいろな経験を積み、それなりに年齢を重ねたからだろうか。淡窓の言葉がよく理解できるようになっていた。教育にたずさわること、それは確かに人間社会における最大の善行なのかもしれない。

（「中」へ続く）